～ セピア色の風景 ～

「隠居」

青田　茂雄
仙台建設業協会専務理事

農家は三世代同居でした。家のつくり、というより屋敷のつくりは母屋に若い世代が住み、別棟である隠居に年寄り世代が住みました。

年寄り世代（その時はそれほど年寄りではない）が若い世代（息子世代、娘婿世代）に財産を引き継いだ（田舎では〝シンショワタシ〟といっていた）後あたりが、隠居家屋へ移り住むタイミングだった。まさに〝隠居する〟だった。

考えてみれば、田舎の隠居制度は合理的だった。

家族総出でやる日中の仕事の指揮権はともかく、その後の別棟生活による若い世代の自力の促進である。と同時に年寄り世代の干渉の排除である。母屋の主ともなれば、接客・交渉・調整をやることになり、世間に対しても、代替わりを知らしめることになる。

もう一つは食生活である。当然、年寄り世代と若い家族の食仕様のギャップが生じてくる。そこで年寄り夫婦だけで食生活ができるうちに、隠居するわけである。

もちろん、時々は大家族で食事をする。農作業で区切りがついたとき、ちょっとした食材が手に入ったとき、昔ながらの農作業と共にあったお祭りのとき、近くの神社のお祭り時も。

また、農繁期となれば母屋、隠居別々のご飯づくり時間はロスそのものなので、一緒に食事をすることになる。

別々とはいっても、おかずの交換（主に母屋から隠居へだが）は、しばしばあった。その〝宅配役〟は、子ども（孫）となる。まさにスープの冷めない距離ならぬ、味噌汁の冷めない距離が、母屋と隠居の距離だった。

●あおた・しげお　1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める